

倭迹迹日百襲姫命 大市墓支障木処理工事に伴う調査

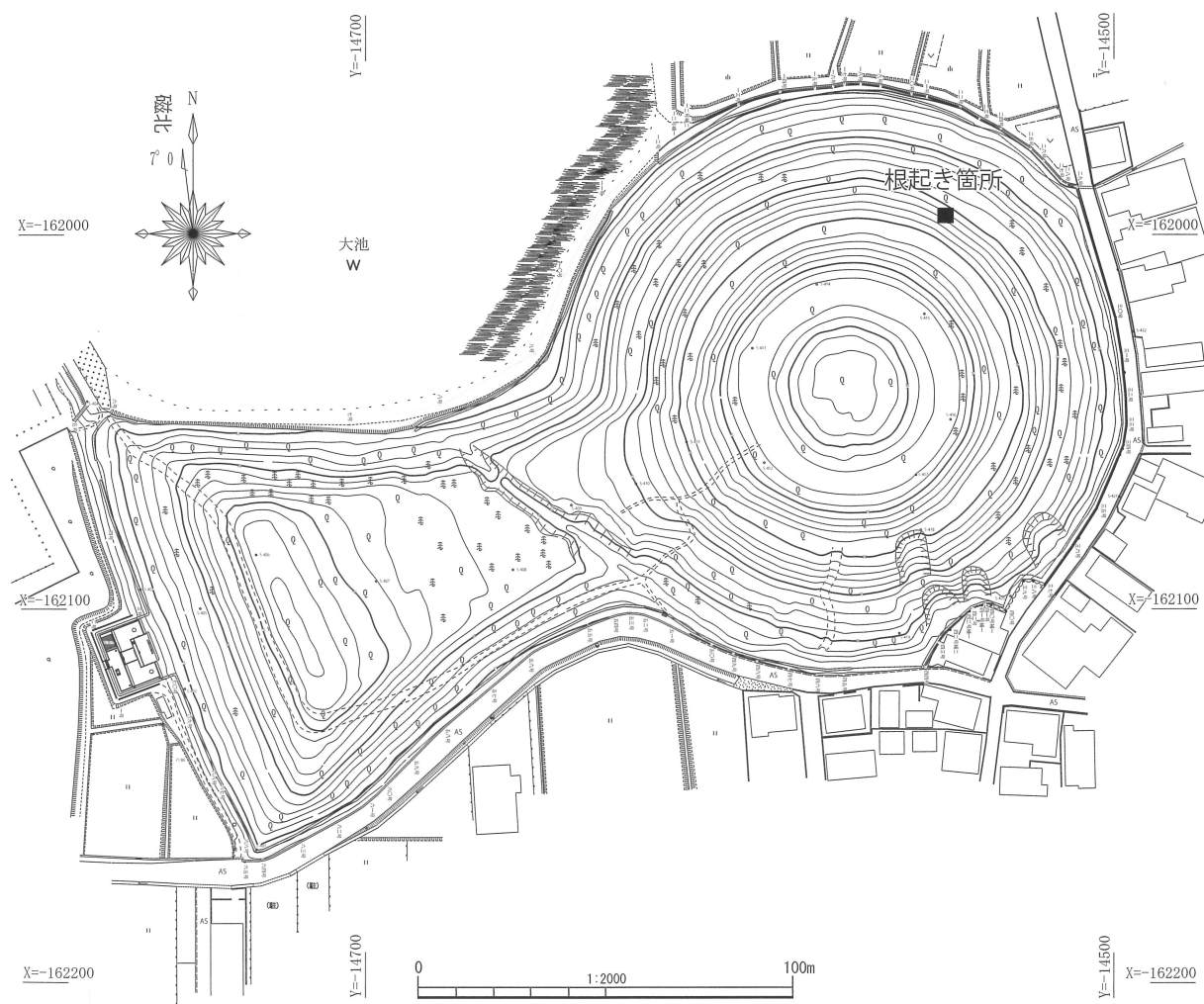
はじめに

孝霊天皇皇女 倭迹迹日百襲姫命 大市墓の現住所は奈良県桜井市大字箸中であり、奈良盆地東南部の三輪山西麓に位置する。この地は岩井川、高瀬川、布留川、纏向川などにより沖積平野が形成されており、大市墓は纏向川がつくった扇状地の上に立地する⁽¹⁾。大市墓は大規模集落である纏向遺跡の範囲に含まれており、大市墓の北西側には纏向石塚古墳を始めとした古墳が築かれ、東方約 300 m の地点にはホケノ山古墳が築造されている。

令和 5 年 6 月中旬に大市墓の後円部東北側の 3 段目斜面において倒木が発生し（第 31 図、図版 51-1～4）、根起きによって葺石が露出した。この連絡を受けて、倒木箇所の処理工事実施前に根起きによる穴を精査し、遺物・遺構の有無を確認することを目的とした調査を実施した。調査期間は令和 5 年 7 月 19 日～21 日であり、調査は土屋隆史・田中詢弥と 畝傍陵墓監区事務所の池田直樹・中野裕樹が担当した。（土屋隆史）

1 治定の経緯と既往の調査

大市墓の場所を示す記事として、『日本書紀』第 5 卷崇神天皇十年九月に「則箸撞陰而薨。乃葬於大市。故時人號其墓、謂箸墓也。其墓者、日也人作、夜也神作。故運大坂山石而造。則自山至于墓、人民相踵、以手通傳而運焉、飫朋佐介珥 菟藝廼煩例屢 伊辭務邏塢 多誤辭珥固佐麼 固辭介氏務介茂」とある⁽²⁾。当墓は



第31図 大市墓 根起き箇所位置図 (1/2,000)

幕末に治定されたが勸註が伝わっておらず、その根拠は明らかではない。谷森善臣は、安政4年（1858）4月23日に当墓を実見しており、「御在所は圓く、前方にて、酉戌の方向きて、三輪山を背になしたり。」（前方後円墳である）、「心なき里の童も、箸御墓と口々傳へて・・・」（地元で「箸墓」と伝承されていること）などを述べており⁽³⁾、これらが治定の根拠とされていたと考えられる。他にも、『日本書紀』第28卷天武天皇元年秋七月には、壬申の乱に際して、天武天皇方が大和の軍を三分して上中下各道を北上し、「是日、三輪君高市麻呂・置始連菟、當上道、戰于箸陵。大破近江軍、而乘勝、兼斷鯨軍後。鯨軍悉解走。」とあり⁽⁴⁾、この地で箸陵という地名が古代以来使用されてきたことなども治定の根拠として考えられる。

また、既に指摘されているとおり⁽⁵⁾、大市墓の墓域は時期によって異なっている。幕末の文久年間には、後円部頂平坦面のみが木柵で囲い込まれていた⁽⁶⁾。当時は墳丘全体が陵墓地とされておらず、拝所も見当たらないようである。後円部頂平坦面のみが陵墓地とされ、木柵の外側は年貢地であることから民間の所有であった（「奈良縣下倭迹々媛命御墓地買上 明治八年十一月十九日」『皇室例規類纂』陵墓門 明治8年 卷14 山陵・諸墓、宮内公文書館所蔵、識別番号：23349-14）。明治8年（1874）11月19日にはその他の墳丘部が持主の士族 萩原言房より購入され、明治19年（1886）5月25日には前方部前面の民有地が買い上げられ、拝所が敷かれた（「新陽明門院御陵并倭迹々日百襲姫命御墓兆域ニ係ル民有地買上 五月二十五日」『皇室例規類纂』陵墓門 明治19年 79卷 山陵2、宮内公文書館所蔵、識別番号：23380-79）。このように墓域が拡張され、現在に至っている。

当墓においては、昭和40年代における採集品の紹介、昭和56年の拝所内見張所の水道管取設工事に伴う立会調査、昭和63年の墳丘外形調査、平成10年の台風7号による倒木被害箇所の復旧に伴う調査、平成17～18年の見張所改築工事に伴う立会調査の報告がおこなわれている⁽⁷⁾。

また平成24年には、奈良県立橿原考古学研究所とアジア航測株式会社が3次元航空レーザー計測システムにより、詳細な測量図を作成した。これにより、当墓が後円部4段（墳頂の円丘部を含まず）、前方部3段からなり、前方部は前面・側面とも3段が想定できることが指摘された⁽⁸⁾。（土屋）

2 調査の状況

根起き箇所は後円部東北側の3段目にあり（第31図）、第2段テラスに近い斜面下側に位置する。木が北側に倒れ、3段目斜面に根起きが生じた。根起き箇所の大きさは東西約3.0m、南北約2.9mであり、根起き部壁面の最大高約1.9m、根起きによる穴の深さ約0.8mである（第32図）。

なお、第31図の測量図は、宮内庁書陵部陵墓課が平成25年度に作成した『孝安天皇陵ほか陵墓地形図作成事業 倭迹迹日百襲姫命 報告書』をもとに作成した。座標は、ITRF（国際地球基準座標系）にもとづいた世界測地系の平面直角座標第Ⅵ系による。（土屋）

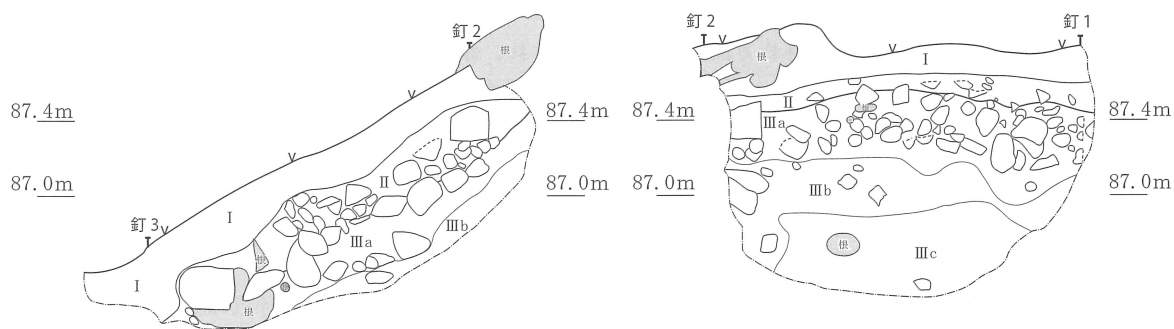
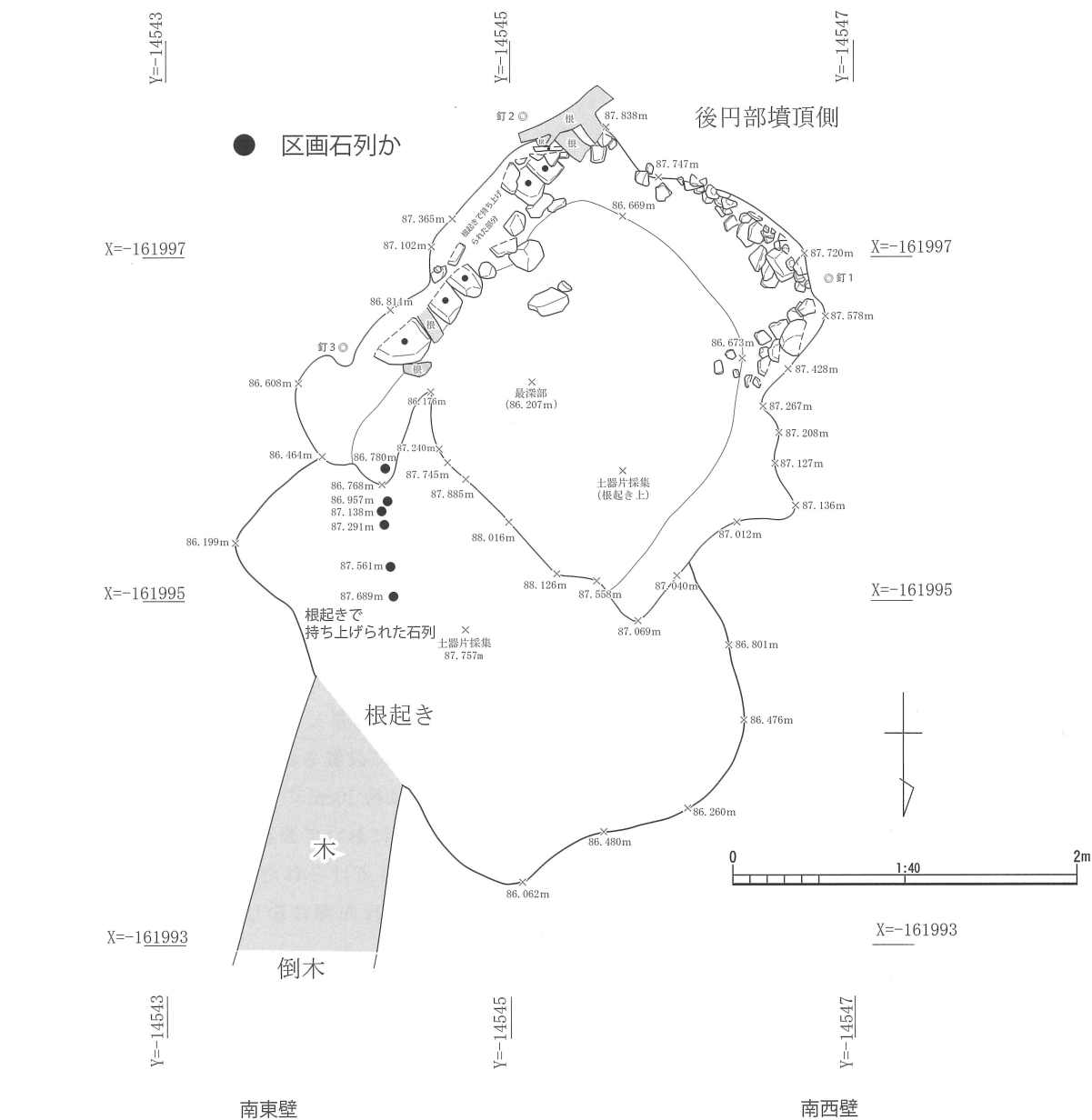
（1）土層の特徴（図版51、52）

精査の結果確認された土層は、上から表土（Ⅰ）、流土（Ⅱ）、墳丘盛土（Ⅲ）であった。表土は厚さ20cm前後の腐植土が堆積している。その下には、拳大から15cm程度の礫を多量に含む流土層が堆積しているが、調査箇所が根起き箇所であるという性質上、木の根による攪乱が著しく、築造後における土層の形成過程を把握することは難しい。

葦石を含む層の下は基本的に同一の暗黄褐色粘質土である。木の根によって攪乱されていない部分は締まった土層となっており、墳丘盛土と考えられる。よって礫や遺物は基本的に含まない土層だが、後述するように土器片が出土しており、墳丘盛土には付近の土砂に含まれていた遺物が混在しているものと思われる。（田中詢弥）

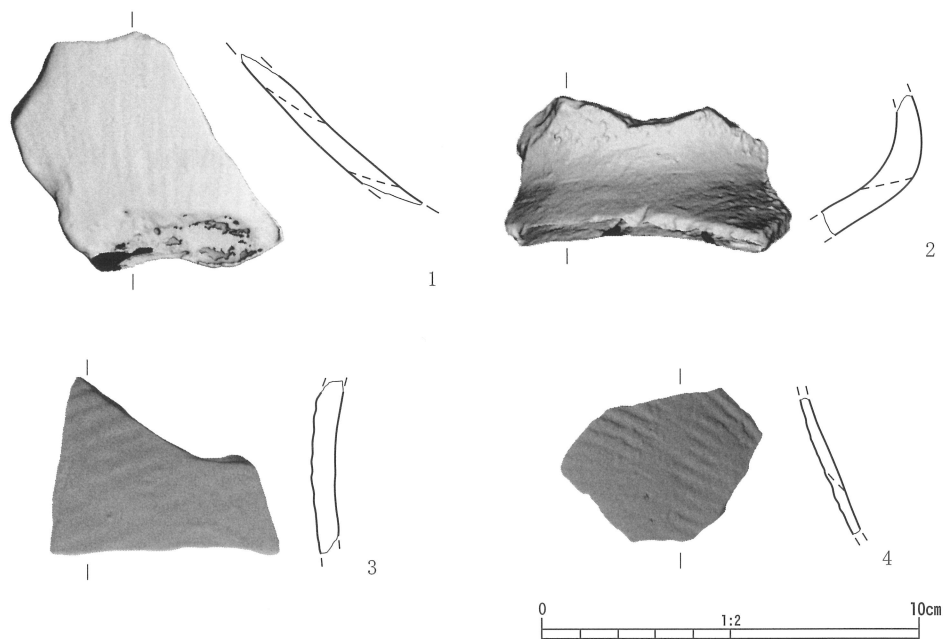
（2）葦石の特徴（図版51、52）

調査箇所は、根起きによって3段目斜面の葦石が持ち上げられた状態であった。精査したところ、根起き箇所の大部分で葦石は本来の位置を保っていなかったが、南東側では葦石の一部が原位置の状態を確認された（第32図）。葦石は斜面に対して長軸を直交させるように並んで配置されていた。これらの葦石は長軸約



- | | | | | |
|---------|------|---------------|-------|-----------------------|
| I 層 | 表土 | 暗黒褐色砂質土 | しまりなし | |
| II 層 | 流土 | 暗黄褐色砂質土 | しまりなし | |
| III a 層 | 墳丘盛土 | 明黄褐色砂質土 | しまりあり | 粘性ややあり 直径1~2mm程度の砂粒含む |
| III b 層 | 墳丘盛土 | 暗黄褐色粘質土 | しまりあり | 粘性あり |
| III c 層 | 墳丘盛土 | 黒褐色混じる暗黄褐色粘質土 | しまりあり | 粘性あり 直径3~4cmの礫を含む |

第32図 大市墓 平面図・断面図 (1/40)



第33図 大市墓 出土品実測図 土器 (1/2)

20cm、短軸約15cmの大きさであり、他の箇所との石と比べてやや大型であることから、区画石列と考えられる（図版51—5～6）。一部に石列が途切れた箇所があるが、根起きで持ち上げられた土の中に、同箇所に対応する石が確認できることから（図版52—6）、元々、石列は良好に残存していたと考えられる。また石列の表裏側には小型の石がみられ、これらが石列の上下に重なるように設置されていたようである。

根起き箇所西側では葺石は原位置を保っていなかった。南西壁では約10cmの大きさの石がまとまって確認され、これらが石列外の葺石の大きさであったようである。南西壁において葺石は標高84.1～84.6mの範囲で検出されており（図版52—3）、小形の石を複数裏込めとして積み上げられた可能性が考えられる。これは廣瀬覚分類でいう葺石A類⁽⁹⁾の特徴にあたる。区画石列のある葺石A類は珍しい特徴であるといえる。（土屋）

（3）出土遺物（第33図、図版52—7）

1は根起き箇所の表土上から出土した。高杯の杯部上側の破片であると考えられる。外面には広範囲で縦方向の篋磨きがみられ、内面の上側には縦方向の篋磨き、下側にはヨコナデがみられる。黄褐色を呈しており、胎土には雲母と角閃石が含まれている。庄内式期のものかと考えられる。

2は根起き箇所の盛土（Ⅲ層）より出土した。頸部の破片であり、立ち上がりが弱いことから壺であったと考えられる。外面の頸部下側には斜め方向のハケメがみられ、頸部上側ではハケメの上からヨコナデがほどこされる。内面の頸部下側ではヨコナデがみられる。色調は暗黄褐色であり、胎土には雲母と角閃石が多く含まれている。奈良盆地東南部産で庄内式期のものかと考えられる。

3は根起き箇所の盛土（Ⅲ層）より出土した。厚さ約6mmであり、甕の胴部中央付近の破片であると考えられる。外面には右斜め上方向のタタキがみられる。外面は薄赤褐色、内面は黒褐色を呈する。胎土には径1mm程度の粒子が少し含まれる。弥生V様式～庄内式期のものかと考えられる。

4は根起き箇所の盛土（Ⅲ層）より出土した。厚さ約3mmであり、甕の胴部下側付近の破片であると考えられる。外面には左斜め上方向のタタキがあり、その上から右斜め上方向のハケメがみられる。内面には左斜め上方向のケズリがほどこされる。内外面とともに茶色を呈する。胎土には雲母と角閃石が僅かに含まれる。大和型の庄内甕かと考えられる。他にも土器細片5点が墳丘盛土から出土している（図版52—7—5～9）。

このように根起き箇所を精査したところ、盛土（Ⅲ層）に相当する土から庄内式期の土器が出土した⁽⁹⁾。出土位置からみてこれらの土器は墳丘上に置かれていたものではなく、墳丘築造時の盛土中に含まれていた

ものであろう。おそらく大市墓周辺の纏向遺跡に由来する土であると考えられる。これらの土器は、墳丘築造時期の上限を示すものであろう。なお、第33図の画像は三次元計測によって作成したものである。

まとめ

今回の調査では倒木の根起き箇所の状況を調査し、後円部3段目下側の葺石を検出するとともに、露出した葺石を図化した。葺石の中には区画石列と考えられるものがみられ、葺石の設置方法についての情報が得られた。また、墳丘盛土(Ⅲ層)中からは、庄内式期と考えられる時期の土器が出土した。これは、墳丘築造時期の上限を知る資料となるだろう。調査後には予定どおり倒木の伐採や処理を実施した。(土屋・田中)

註

- (1) 清水眞一『最初の巨大古墳・箸墓古墳』(シリーズ「遺跡を学ぶ」035)、新泉社、2007年。
- (2) 坂本太郎ほか校注『日本書紀 上』岩波書店、1967年、p.247。
- (3) 谷森善臣『蘭笠のしづく』柳原本、宮内庁図書寮文庫所蔵、函架番号：柳・978。
谷森善臣『蘭笠のしづく』『勤王文庫』第3編 山陵記集、大日本明道會、1921年、pp.241-323。
- (4) 坂本太郎ほか校注『日本書紀 下』岩波書店、1967年、p.405。
- (5) 有馬 伸「倭迹迹日百襲姫命 大市墓見張所改築工事に伴う立会調査」『書陵部紀要』第58号、宮内庁書陵部、2007年、pp.67-71。
- (6) 鶴澤探眞『文久修陵図(草稿)』諸陵寮本、宮内庁図書寮文庫所蔵、函架番号：B2・283。
- (7) 中村一郎・笠野 毅「大市墓の出土品」『書陵部紀要』第27号、宮内庁書陵部、1976年、pp.57-65。
佐藤利秀「大市墓水道管取設工事箇所の調査」『書陵部紀要』第34号、宮内庁書陵部、1983年、pp.92-94。
笠野 毅・土生田純之「大市墓の墳丘調査」『書陵部紀要』第40号、宮内庁書陵部、1989年、pp.78-83。
徳田誠志・清喜裕二「倭迹迹日百襲姫命 大市墓被害木処理事業(復旧)箇所の調査」『書陵部紀要』第51号、宮内庁書陵部、2000年、pp.26-40。
註(5)有馬論文に同じ。
- (8) 西藤清秀「箸墓古墳・西殿塚古墳の墳丘の段構成について」『榎原考古学研究所論集』第16、八木書店、2013年、pp.41-51。
- (9) 廣瀬 寛「葺石と段築成」『古墳時代の考古学3 墳墓構造と葬送祭祀』同成社、2011年、pp.64-73。
- (10) 土器の位置づけについては、杉山拓己氏と山本亮氏にご教示を頂いた。記して謝意を示したい。

附 倭迹迹日百襲媛命 大市墓出土の石材と土器片に含まれる砂礫

奥田 尚

大市墓の後円部中段の樹木の根起きにより出土した石材の一部22個を裸眼で観察し、石種を同定した。その形状と岩相をもとに石材の採石地を推定した。また、当地から出土した土製品破片の表面にみられる砂礫を裸眼と倍率20倍の実体顕微鏡で観察し、その砂礫構成を基に砂礫の採取地を推定した。採石・採取推定地は出土地に近距離の地で同様のものが分布する地とした。

1 出土の石材

石材の石種、石種と形状、採石推定地について述べる(第2表)。

(1) 石材の石種

観察した資料22個の石種と個数は、橄欖石安山岩が1個、細粒黒雲母花崗岩が1個、中粒アプライト質柘榴石黒雲母花崗岩が4個、斑状アプライト質柘榴石黒雲母花崗岩が4個、ペグマタイトが1個、中粒斑柘榴岩が10個、粗粒斑柘榴岩が1個である(第3表)。各石種の特徴を第3表に示す。



1 倒木箇所 西側から（調査前）



2 根起き箇所 倒木の上から（調査前）



3 根起き箇所 東側から（調査前）



4 根起き箇所 南側から（調査前）



5 根起き箇所全景 倒木の上から（調査後）



6 根起き箇所 区画石列検出状況 北東側から



1 根起き箇所 区画石列検出状況 北側から



2 根起き箇所 南東壁 北西側から



3 根起き箇所 南西壁 北東側から



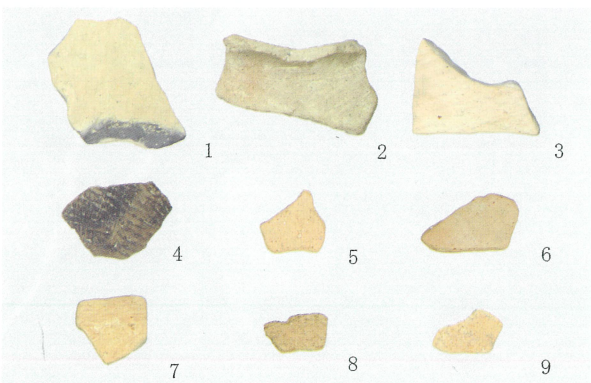
4 根起き箇所 北西壁 南東側から



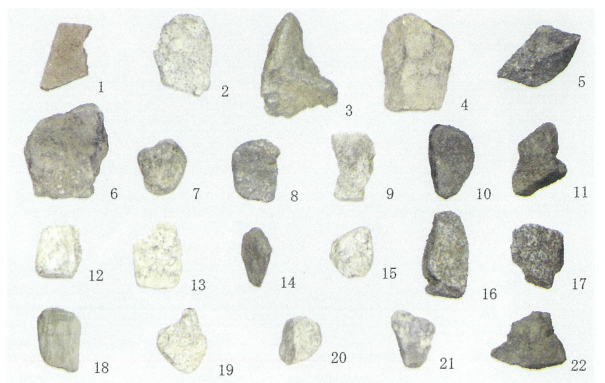
5 根起き箇所 南西側から



6 根起き箇所 区画石列の露出 東側から



7 出土遺物



8 検出された葺石の一部